7 今回の対局の解説を務めて

佐藤 康光
（社）日本将棋連盟

今回，私は清水女流王将 VS「あから 2010」の解説を務めさせていただき，私にとっては初めてコンピュータ将棋をじっくりと観戦する機会に恵まれた．当日は私の想像をはるかに超える観戦者，マスコミ関係者がお越しになられた．世間にいかに注目された対決だったか，というのを実感した．この対局について私なりの正直な感想というのを述べてみたい．

まず，驚いたのが序盤の長考である．駒がぶつかる前の長考というのはプロでは自然なことだが，それ以前の十手台の駒組みを決めるあたりの長考というのは意外であった．ここまでは意表を衝かれる手順がなく，事前に想定できる範囲内であり，人間であればかえって迷っているのではないか，とあまり良くない兆候と見られることになるが，コンピュータがここで少しでも何が良いのかを考えていたのであれば，それは敬意を表したい．現在のプロ将棋においても駒組みまでの一手一手の重要性の認識が高まり，常に試行錯誤している段階である．少しずつではあるが感覚，感性が磨かれこのあたりの一手の価値が高まっている．ここ十年でプロ将棋が最も進歩した分野でもあるだけにそこを追求したのであれば素晴らしいと思う．

そして 26 手目△ 4 四角からの動きは善悪は別にして現代将棋らしい感覚である．穴熊に囲われる前に動く，というのは現代プロと同じ．ここにも感心した（図 -1，後手 26 手目）．

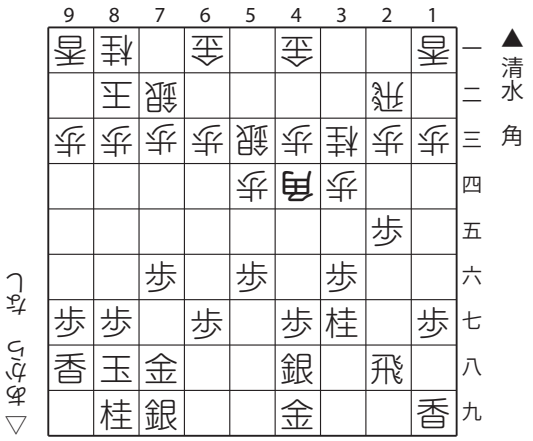
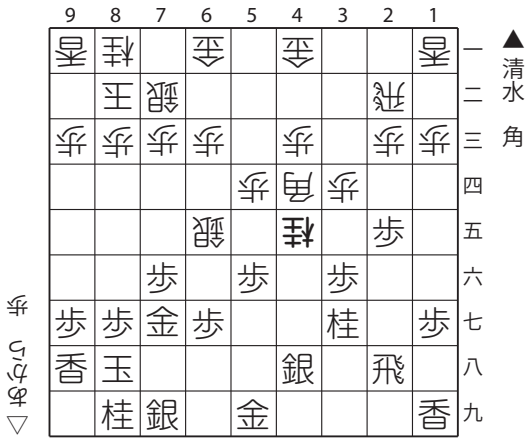


図 -1　後手 26 手目

しかるに 36 手目△ 4 五同桂とは何事か．恐らく私の弟子が指したらこれにて破門となる一手だろう（図 -2，後手 36 手目）．

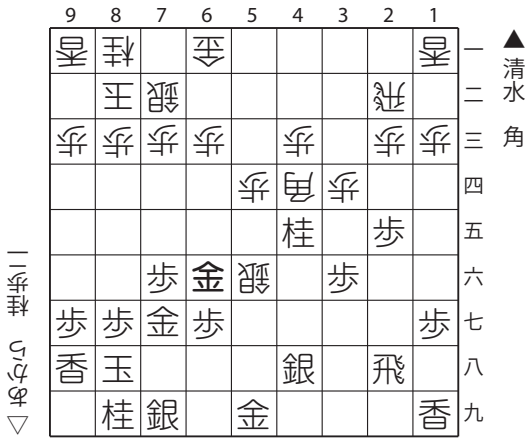
ここは△ 5 三角で難しいがコンピュータ側も十分指せたと思う．本譜の進行はあまりに含みというか妙味もなく単純である．プロならこういう展開というのは事前に避けた将棋の作りにするものである．しかし，驚いたことに清水さんはこの手を予想していたとのこと．事前に深くコンピュータ対策を練っていただけにそうなったのだろうが，今思うに対策を考えすぎたために本局ではかえって本来の清水さんの将棋感覚にズレが出てきたのではないか．そのあたりに本局の敗因があったような気がする．

ただ形勢は清水良しとは思うが微差である．39 手目は単に▲ 2 四歩が勝ったと思うが，43 手目▲



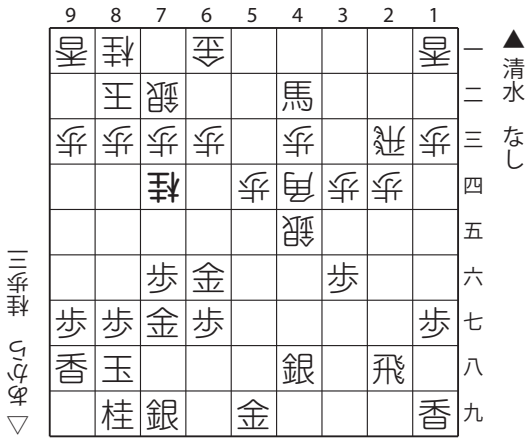
【第 36 手△4 五同桂　まで】

図 -2　後手 36 手目



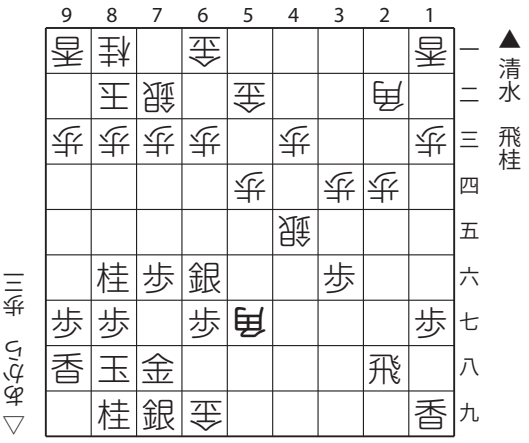
【第 43 手▲6 六金打　まで】

図 -3　後手 43 手目



【第 50 手△7 四桂　まで】

図 -4　後手 50 手目



【第 66 手△5 七角　まで】

図 -5　後手 66 手目

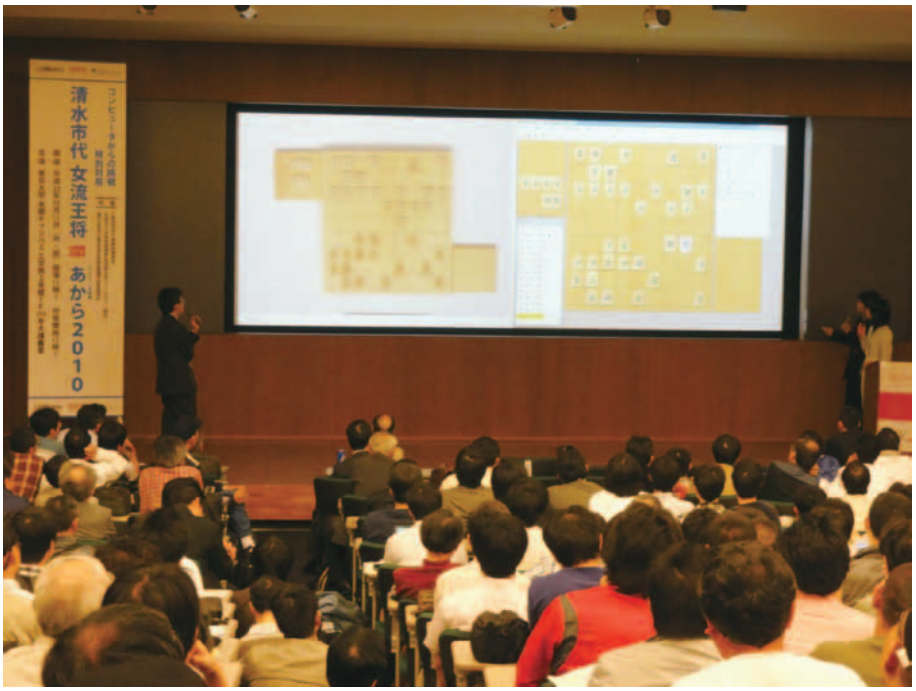
6 六金打は本局で一番驚き，また時間が経つにつれ感動が深まった一手である（図 -3，後手 43 手目）．

数々の修羅場をくぐり抜けてきた清水さんの将棋観を表した手である．清水さんの胸中を思い，心が熱くなった．将棋界，女流棋界の代表としての背負っているものの大きさ，重さを感じ，この手の素晴らしさ，この感動を皆に伝えられたかどうかが今回の解説者としての私の役目であったかと思う．

50 手目△ 7 四桂．これまた勝負手ではあるが，これも人間が指したら破門に近い一手．私見では 51 手目▲ 6 五金ならはっきり清水さんが良かったと思う．清水さんが時間に追われたこともあるが，桂 2 枚で金 2 枚取られたのは痛く，ここで形勢は逆転した（図 -4，後手 50 手目）．

しかし勝負はどう転んでもおかしくない局面だったが，ここからのコンピュータの指し方は衝撃を受けた．64 手目△ 6 九金と 66 手目△ 5 七角（図 -5，後手 66 手目）．

ぱっと指されるとこの 2 手はいろいろな感情が渦巻いてくる．私なら△ 6 九金を見てまずありがたいと思い，しかし思ったより難しい，そして△ 5 七角を見ると何だこれは．ひょっとして私をナメてる？そしてあれよあれよという間にはっきり負けに．こんな感じではなかったろうか．少なくてもここは何か受けておきたいというのがプロの感覚，人間の常識だろう．そこを手抜いても良いと判断したコン



ピュータの最善を求めた卓越した読みと勝負術は見事だった．勝負術という機能を持っているとは思わないのだがそう感じさせる手順だった．「桂先の銀定跡なり」という格言があるのだが，この場合はそれができれば一番良い．ぎりぎりまで受けず，80手目△8五銀でそれを完結させた．ただ，これは学んでもなかなか人間にはできないコンピュータならではの芸当だろう．玉の命の大事さ，尊さを知っている人間には無理なのである．

67手目▲7七銀では▲7七桂が勝ったが，後で研究してみるとそれは△4六角成以下長期戦になる．ただやはり清水さんが良くはならないことが分かった．このあたりコンピュータがどう考えていたのかは興味深い．

そして勝負はコンピュータの勝利で終わった．対局後の清水さんの態度もこれまた見事だった．なかなかできないことだ．さすがに第一人者．敗者も美しく立派だった．

今回，内容的にも見所の多い対局だったが，正直コンピュータがどのくらいの強さかというのは分からなかった．まだ部分部分の強さのギャップがかなりあるという感じ．ただ人間の感覚として受け入れられない部分がないというのは大きな強みと思う．現在の男性タイトル保持者クラスが負ける日が来るかどうかは分からないが，将来的にはトッププロの一員のレベルまでは到達すると推測する．しかし，十年前にこのような状況が起こるとはまったく考えていなかったのでこの先，どうなるかは想像もつかない．時代は恐ろしいスピードで流れているのだな，と感じている．日本将棋が現在の形になって約五百年．神が駒の配置をしたのではないか，と最近思っているのだが，世界でも稀なこの知能ゲームをコンピュータが完全に凌駕してしまうのだろうか．それは来ないと信じている．また，期待としてはプロ棋士の強さがどの程度のものなのか，数値である程度表せるような研究も見てみたい．

（平成22年12月20日受付）

佐藤康光
1969年生．1982年6級，1984年初段，1987年四段，1989年五段，1992年六段，1993年七段，1996年八段，1998年九段．タイトル獲得12期，優勝10回．